

## 彙報

## 辻直四郎先生の長逝を悼む

原 実

昭和五十四年八月末、折から英国ケンブリッジ大学に在った筆者の手許に京大の大地原豊氏より速達特別便が届き、辻先生が八月初より国立南横浜病院に入院されている事が報ぜられた。直ちに私は病院宛に速達特別便でお見舞状を認めたが、越えて九月十日、田中於菟弥氏の意を体した同僚の前田専学氏は先生の容態の急変を告げて私に早期の帰国を要請された。斯くて九月十九日、一切の公務を片付けてロンドンを発ち、一年ぶりに成田に帰着したのは残暑尚きびしい九月二十日の深更であった。翌二十一日午後七時、私は梯子夫人の許可を得て病室に親しく辻先生を訪ね、帰国の御挨拶を申し上げた。既に点滴注射のみによって辛うじて体力を支え、意識も既に混濁しておられるとのことであったが、一年ぶりに先生の温い手を取った時心なしか先生はにっこりされたようにみえた。その直後、先生は痰咳の発作に見舞われて苦しうにされる。その度びに梯子夫人は割箸の先に脱脂綿をふく

ませて先生の口から丹念に痰を取り除き、懸命の看病を続けられた。痛々しい御闘病の様子を見られるのを厭われるかのように、先生は又心なしか非常に嫌な顔をされた。常日頃端然として他人に接するを旨としておられた先生にとってこれは当然のことである。兼ねてから私は先生の快・不快の表情を心得ていたので、約一時間半の後に私は再訪を約して病院を後にし、夜道を帰宅の途についていたが、余りの変りよう、御衰弱の様子をみて暗然たる気持に襲われた。三日後の九月二十四日、残暑去って秋の訪れを感じさせた日の夜半、梯子夫人よりの電話は思いがけず先生の御逝去を報じた。驚愕と悲歎の中に、私は取り敢えず榎一雄、田中於菟弥両氏に連絡して今後の指示を仰ぎ、真夜中の高速道路に車を駆って一路鶴沼に向った。二十五日午前一時半、一年振りの御自宅での再会は何と御遺体とのそれであり、梯子夫人、御令嬢美子様、御親族の福島元氏と四人で夜を徹して御遺体に付き添った。九月二十五日通夜、二十六日密葬、鎌倉東慶寺の井上禅定師より「韋陀院阿吽宗直居士」の戒名を受けられ、同日午後四時茶毘に付せられ、御遺骨の御帰館は秋の日の夕闇迫る頃であった。越えて十月四日、午後二時より、久しくその文庫長、理事長の職に在られた、先生ゆかりの東洋文庫講堂に於いて、榎一雄博士が葬儀委員長となり、しめやかに告別式が執り行われ、約三百五十人が弔問した。十月二十三日、閣議決定に

より逝去の日にさかのぼって正三位勲一等瑞宝章の追位追勲があり、越えて十一月三日文化の日、午前十一時より東慶寺に於いて埋葬式が催され、ここに七十九才を一期として一代の碩学は松籟こだまする古都の一角に永遠の眠りに就いたのであった。以上が御逝去前後より七七日に到る経過であるが、八月初旬結核の進行を告げられて即刻入院と決った時、先生は一体どのようなお気持で南横浜病院に向われたか、又真夏の鬨病の日々をどのようにして過されたか、これらを思うと今尚私は胸の痛むのを覚える。

辻先生は旧姓を福島といい、明治三十二年十一月十八日東京に誕生された。久松小学校、東京府立第一中学校、第一高等学校を経て、大正九年九月東京帝国大学文学部言語学科に入學され、同十二年三月卒業された。在学中は主として藤岡勝二、高楠順次郎両博士に師事されてインド・ヨーロッパ語比較言語学、サンسكريット語学・文学を修められた。大正十三年三月、先生は梵語梵文学研究のため渡欧の途に就かれ、英国オクスフォード大学でA・A・マクドネル、ドイツ・マールブルク大学でK・F・ゲルトネルに師事され、主としてヴェーダ語の研究に専念された。昭和二年四月、三年間の留學生活を終え、セイロン・インドの実施踏査を経て御帰国、折から停年退官された高楠博士の後を承けて東京帝国大

学文学部講師、次いで助教御任官になり、同十七年教授御昇進、以後同三十五年三月停年御退官迄、三十有余年に亘って梵語梵文学講座を担当され、御研學の傍ら、学生に梵語・梵文学を講じ、幾多の卓れた俊才をその門下に育成された。この間、昭和二十二年に文学部評議員に選出され、東洋文化研究所長を兼ね、同二十五年文学部長、二十九年教養学部長の要職を歴任され、東大評議會に列すること前後十二年に及び、再度に亘って東大総長事務を代行され、新旧学制の交替期に當って東大諸部局の整備と発展に尽瘁された。その明晰適切な判断と、卓越した事務処理の能力は定評あったところで、先生の關係された団体・機関は常にその意見を仰ぎ、その運営に先生の参加を乞うた。昭和三十五年五月、東京大学は名誉教授の称号を先生に贈ったが、先生はひきつづいて慶応義塾大学語学研究所に於いて教鞭をとられ、四十年十月迄同大学教授の職に在った。三十六年七月、東洋文庫内に設立されたユネスコ東アジア文化研究センター所長の委嘱を受け、又同八月、日本ユネスコ国内委員会委員となって海外との學術交流に貢献された。財団法人として、又国立国会図書館支部として、東洋文庫と先生の因縁は浅からず、昭和三十一年七月に理事、四十年文庫長、四十九年には理事長に就任された。

これより先、日本学士院はその卓れた学問的業績の故に昭

和二十八年十月先生を会員に選定したが、ここでも先生は幹事(三十七年)、第一部長(四十五年)の要職を歴任され、日本学士院を代表して国際学士院連合の会議に出席すること六回(三十五・三十八・三十九・四十・四十一・四十二年)、又後者を代表して国際哲学生人文学協議会に出席すること前後四回(三十四・三十八・四十・四十二年)に及んだ。この他、二十九年東方学会理事、三十八年文部大臣学術顧問となり、日本語学会、日本印度学仏教学会を初めとする数多くの学術団体の理事・評議員を務められ、それらを挙げれば際限がない。唯、この中であつてフランス東洋学会(昭和三十三年)とインドのバンドルカル東洋学研究所は先生をその名誉会員に、又英国学士院はその客員会員に推し(昭和四十六年)、更に昭和五十年六月、先生が国際サンスクリット学会の副会長に選出された事は特筆に値する。国家が先生の多年の学界への貢献に報いるに勲二等旭日重光章の叙勲を以つてし(昭和四十六年四月)、又文化功勞者としてその功績を顕彰し(昭和五十三年十一月)、更に逝去に當つて追位追勲したのは誠に宜なる哉と思われる。以上が先生の略歴をふまえて、その国の内外に亘る御活躍の跡を辿つたものであるが、次に先生の著書を中心としてその学問的業績の一端を略述することとする。

先生の学問は、その専門とされたヴェーダ文献学を中心として広く且つ深く、その方法は周到にして且つ精緻を極めていた。そのお人柄、生活態度を反映してその学风は潔癖なまでに端正で格調高く、古今東西の万巻の書籍を渉猟して学の淵奥を極めながら、その筆致は極めて軽妙にして洒脱であつた。軽少な体軀の中に具現していたものは過去二世紀の研究史を踏えたインド学の全体であつたが、これを可能ならしめたものは類稀な先生の卓れた語学力に在つたと信ずる。その蔵書は諸外国語による研究書を系統的に網羅し、量質共に世に冠絶するところとなつたが、先生は常に私共に本を買ふことは、如何に貧乏しようとも、学者の義務であると論じ続けられた。因みにその蔵書は凡て東洋文庫に収納されることとなつてゐる。万巻の書に囲まれて学究生活を続けられた先生が、印刷物の形で世に問われたところはその学殖のほんの一部に過ぎないが、それでもそれらを簡単に紹介することは決して容易でない。便宜上以下に先生が最もその心血を注がれた「ヴェーダ学」、本邦のインド研究者が未永くその恩恵に浴するであらう「標準的概説書」、古典の翻訳のあるべき姿を示し、読書界が鑽仰してやまないインド古典の「翻訳」の三項目を立て、それらの下に半世紀に亘つて碩学の歩まれた道を辿つてみたいと考える。

先ずその第一類「ヴェーダ学」は広くサンヒター、ブラーフマナ、ウパニシャッドに亘っているが、その中で特に専門とされたところは祭式文献の系統論的研究、就中ヤジール・ヴェーダのそれであった。その成果は三大部、「ブラーフマナとシュラウタ・ストトラとの関係」（昭和二十七年）、「現存ヤジール・ヴェーダ文献」（昭和四十五年）、「ヴェーダ学論集」（昭和五十三年）に結晶している。次いで第二類として挙げられるものに「サンスクリット文法」（昭和四十九年）、「サンスクリット文学史」（昭和四十八年）、「サンスクリット読本」（昭和五十年）と「梵和大辞典」の完成（昭和四十九年）がある。これらは一九七〇年代に相次いで刊行されたから、この十年間に日本のサンスクリット学はその基本的・標準的入門書の決定版を先生御一人の手によって悉く整備しおえたこととなった。第三類は「リグ・ヴェーダ讃歌」（昭和四十五年）、「アタルヴァ・ヴェーダ」（昭和五十四年）、「シャクンタラー姫」（昭和五十二年）の岩波文庫三冊に代表され、「古代インドの説話」（昭和五十三年）、「サンスクリット読本」の翻訳部その他にみえる先生一流の文学的翻訳である。荘重なサンヒター文献、質素枯淡なブラーフマナ文献、絢爛たる古典美文調詩歌、その各々の味わいを邦訳の上に反映させようと先生は努力された。機械的翻訳は「梗概」記述に過ぎず、翻訳者は作者の意を汲んで須く Übersetzungskunst に心を

配るべきであるとは常日頃先生の持論とされたところであったが、先生の類稀な語学の才は和漢の詞藻の豊かさにも顕われて、外国語に堪能なる者は先づその自国語を大事にする道理を親しく私共に教えられるようであつた。そしてこれら三類に共通しているものは高尚典雅な学風と、周到に準備された書誌学的注解にみえる整理された該博な知識で、これらが常に先生の書かれるものを特徴づけていた。後者は又先生が残された数多くの書評や文献紹介に遺憾なく発揮されている。以上の概略を踏えて次下にその御著作の一々を可能な限り解説して行くであらう。

昭和二十七年先生は、曾つて東大に学位論文として提出された「ブラーフマナとシュラウタ・ストトラとの関係」を東洋文庫より出版された。先生はその骨子を第二十三回国際東洋学者会議（昭和二十九年、英国ケンブリッジ）に於いても口頭発表されたが、その研究の発端を我々は夙に昭和六年刊「宗教研究臨時特輯号」の論文「カータカ儀軌の研究」（『A Collection of the Sūtra elements from the Kārikānam, Commemoration Volume of the Science of Religion in Tokyo Imperial University, 1934』）の中に見出すことができ。即ちブラーフマナにみえる儀軌要素と、シュラウタ・ストトラの祭式執行の諸規定を仔細に比較検討してみると、学

派によって多少の出入はあつても、概して両者の関係は極めて緊密であり、ストトラ作者は該ブラーフマナの儀軌部分を前提していたことが明らかとなる。先生はこの比較研究をアグニシュトーマと献獸祭の記述を例にとつて遂行され、両者の親近関係を確信されるに到つた。即ち黒ヤジユル・ヴェーダ所屬のマイトラヤーニー・サンヒターの儀軌要素は同派のシュラウタ・ストトラ（マーンナヴァ及びヴァラーハ）の規定に平行を見、後者が前者を前提としている事実が明らかとなれば、現存カタ派ブラーフマナの儀軌要素の蒐集は、今は失われ、わづかに他文献にみえる引用のみによつてしか知られていない同派のシュラウタ・ストトラ（ヤジュニヤ・ストトラ）の復原を可能ならしめる道理である。このカタ派シュラウタ・ストトラ再建を根本軸として、汎くブラーフマナ、カルバ・ストトラを渉猟され、先生独自の方法論を打ち出されたのがこの学位論文に他ならない。この書を繙く者は若き日の福島直四郎の自信に充ちた学問的気魄を感じ取ることができるであろう。この書はルヌー、カシーカル、ゴンダ等斯学の第一人者の評して讀えるところとなつた。（JA, 241, p. 280, ABORI, 35, p. 285, *Ritual Satras*, pp. 496-498）。

この学位論文の付録として用意され、後年東洋文庫より出版されたものが「現存ヤジユル・ヴェーダ文献」である

が、この書の成立にまつわつて筆者に思い出がある。昭和四十四年、先生が古稀を迎えられるに當つて筆者は先生の Kleine Schriften の刊行を企画し、先生の著述目録を用意して四十三年夏、高津春繁氏と同行して鶴沼に参上し、その御承諾を乞うた。ところが先生は言下にこれを拒否され、今は意に満たぬものとなつた旧稿を今更集めて人目に曝すような企画は迷惑千万、直ちに斯る企画を放棄するようきつく戒められた。途方に暮れた私共に対して先生は、これに替るに新著一卷を以つて進ぜようと約束された。その潔癖性と前向きな精進の姿勢に私共は強く打たれたが、果して昭和四十五年三月、形をなしてこの書となつた。本文八三頁、それを遙かに上回る一三〇頁に七九二項目に昇る詳細な注を盛る本書は、先生のウル・ヤジユル・ヴェーダ・サンヒターの復元という壮大な企画の一環をなし、学位論文作製以来四半世紀に亘る研究文献を更に追加網羅して、この時点に於ける斯学の最高水準を示した（II, 14 pp. 260-261）。これによつて読者はヤジユル・ヴェーダの諸学派とその系統を、サンヒターよりカルバ・ストトラ、更にダルマ・シャーストラに徴して知ることができ、その各々の研究史を繙くことができる。同種の試みは曾つてサーマ・ヴェーダのサンヒター部に限つてなされたことがある（現存 Samaveda 文献の概説 [Sainia 篇]、慶大語学研究所、語学論叢、昭和二十三年）。

昭和五十年夏、先生は医師より肺気腫の診断を受けられ、以後は自宅に籠り、上京されることが絶えてなかった。以前高津、田中、峯村、三根谷、風間の諸氏と共に先生の誕生日を赤坂浅野で祝っていた習慣もこれ以後舞台を鶴沼に移すこととなったが、この頃より逝去迄の四年間は今から思うと先生が身辺整理を意識的に心掛けられた時期であったように思われる。即ち先生は以前書かれた論文、翻訳に手を加え、御自身の残されたものをこの期間に端然と整理されたのである。その中の最高にして最大なものが「ヴェーダ学論集」である。本書は著者が序文に言う通り「他日無差別に集録されることのなからんため、みづから選んで一書に収めた」ものであり、ヴェーダ文献学に関する論文一四と付録三篇を収め、巻末に主要著述目録を載せて、謂わば先生の学殖の集成、決算の趣を呈している。本書は大地原豊(JA, 267, pp. 268-89)、岩本裕(東洋学術研究 十七、九四一—一〇四頁)、ド・モンツ(JJF, 21, pp. 44-45)の諸碩学の紹介し、鑽仰したところであるから今は詳細をそれらに譲ることとする。

先生のヴェーダ研究に連関して、その著書「インド文明の曙」(岩波新書)と「古代インドの説話——ブラーフマナ文献より——」(春秋社)が言及されねばならない。前者は昭和四十一年三月古典講座の放送を基に増補したもので、副題に「ヴェーダとウパニシャッド」と掲げられてあるが、同名の既

刊書(創元社、昭和二十八年)とは体裁・内容共に異っている。広義のヴェーダ文献をその歴史・言語・哲学・宗教に亘って翻訳を交えながら平易に解説したものであるが、ヴェーダ学研究史に明るい読者は先生の論述の端々に新旧学説が着実に踏えられている事実を直観するであろう。学の蘊奥を極めた者のみに許される平易な叙述の特権がここに示され、概説書の理想像が提示されている。筆者は曾つてこの書を評するに「学問的芸術品」の語を以てしてした。後者はブラーフマナ文献、就中シャタパタ、ジャイミニヤの二大雄篇から文学史的・文献史的に興味ある説話を集めたものである。全三二項目の中には旧約聖書ノアの方舟を思わす「マヌと大洪水の物語」、リグ・ヴェーダに淵源し、且つ後世カーリダーサの戯曲の先驅をなした、人間の王と天女の恋を謳う「ブルラヴァスとウルヴァシーの物語」、アリアン文化の東漸を示唆している「普遍火東進物語」等が収録されている。各項は邦訳、解題、訳注より成っているが、後二者と「あとがき」とは専門研究者に欠かせない研究的資料を提示している。

尚、サンヒター部分の翻訳としては、リグ・ヴェーダより約一七〇、アタルヴァ・ヴェーダより約一三〇の讃歌を選んて各一冊となし、岩波文庫より刊行されている。ウパニシャッド部分もその著書の随所に重要章句の多くを邦訳し、古くは高楠博士監修の「ウパニシャッド全書」の企画にも参加され

だが、先生が独立の書としてウパニシャッドの翻訳を残されることはないままに終ってしまった。

著述群の第二类「標準的概説書」の中では、年代的に「サンスクリット文学史」が先行する。全八章より成る本書は「サンスクリット文学の特徴」と題する序章に始まり、カーリダーサの作品を中心として馬鳴より筆を起し、美文体敘事詩、散文、戯曲を作家別に扱い（前六章）、抒情詩、教訓詩、物語文学を概観し、更に付録としてカーリダーサの作品より六篇の抄訳を載せている。本文は一六七頁に過ぎないが、それと略々同量に匹敵する後半は八九九項目に昇る内容豊富な註に当てられ、研究者に書誌学的情報を提供している。

「文学史」に続いて翌年の昭和四十九年、同じ岩波全書より「サンスクリット文法」が公刊された。先生は以前にも「仏教大学講座」に田中於菟弥氏と共に「梵語文法」（上中）（昭和八年）を執筆され、研究社の「世界言語概説」の中にも「梵語」（昭和二十七年）を担当されて、文法を中心に梵語の大綱を極めて要領よく紹介された。その他、印欧語比較言語学（国語科学講座Ⅰ、昭和九年）、インド・アリアン語史、ドラヴィダ語等について概説された（「印度」、昭和十八年）こともあり、近くは鍔淳氏の「J・ゴンダ、サンスクリット語初等文法」（昭和四十九年）を校閲されたこともあつ

たが、F・キールホルン、L・ルヌー、J・S・シュペイエルの名著を基礎に、詳細な記述文法と構文論を一冊にまとめたのはこれが最初であった。本書は二応入門書と銘打って、確かに変化表その他解説は明解を極めているが、註の記述を含め、随所に極めて専門的な細則を盛り、サンスクリット文法の奥行きを窺わしめる。近時本書の索引が鍔氏の手によって完成され（昭和五十二年）、本書の使用をより便利なものとした。

続いて翌年の昭和五十年、春秋社より「サンスクリット読本」が出版された。本書は「選文」「翻訳」「韻律略解と注記」「語彙」の四部より成り、既述の岩波全書の二著、就中「文学史」と不離不即の関係に在る。「選文」に掲げられたところは「物語文学」「美文体敘事詩」「美文体散文」「戯曲」「抒情詩と教訓詩」「仏教文学」の六分野に亘り、一般読者は流麗な翻訳部によって梵文学にひきいられ、専門的研究者は注記部によって多大の便益を享ける。特筆すべきはこれら諸分野によって先生が訳文の調子を苦心して変えておられることであり、斯くて訳文は夫々原文の情趣を伝えることとなった。本書は斉藤光純、津田真一両氏の主宰する豊山原典研究会で久しく先生が教科書として使われたもので、講義は月一回護国寺で行われ、それは先生の病氣診断による上京不能の機まで続き、今や関係者にとって思い出深いものとなつ

た。

先生の今一つ重要な業績は荻原博士によって始められた「漢訳対照・梵和大辞典」の再開・継続・完成に在る。周知の通りこの辞典は昭和十五年に第一分冊が刊行され、同十八年迄に六分冊の刊行をみたが、第二次大戦の余波を受けて中断の已むなきに到った。昭和三十九年七月、本辞典は辻先生監修の下に鈴木学術財団から第七分冊の刊行を、十年の歳月を経て同四十九年五月第十六分冊の出版で完結した。先生御自身はその功を荻原博士に帰し、これに自らの名の冠せられるのを極度に遠慮しておられたが、先生の理解と熱意なしにこの継続・完成は望むべくもなかった。個々の語義の細目に関して先生の責任を問うことがたとえ出来ないとしても、この辞典の完成は先生の業績の中に数えて然る可きものと信ずる。本辞典は邦語によるものとしては最初のもので、漢訳との対照は国の内外の学者に資するところ大なるものがあつた。尚、本辞典は現在全十六分冊をまとめて一冊となし、講談社より発売されている（昭和五十四年）。

先生の著作の第三類「翻訳」に関しては上來屢々、関説するところがあつた。リグ・ヴェーダ、アタルヴァ・ヴェーダ讃歌、ブラーフマナ説話を始め、既述の「読本」の翻訳部がそれに相当している。その他、梵文金華瑤英の名の下に代表的

作品の主要部分はその著作・論文の随所に翻訳されている。

その引きしまつて無駄のない、端正な文章は語学力と才力の致すところであつたが、邦訳に対しても先生は独自の高邁な識見を持つておられた。凝古文を用い、格調高く且つ優雅な邦訳は就中その「シャクンタラー」の中に見出すことができる。この書は夙に刀江書院より昭和三十一年出版され、当時日仏会館長の職にあつた一代の碩学、L・ルヌー博士に献呈されているが、昭和五十二年「シャクンタラー姫」の題の下に岩波文庫に収録せられた。「日本における外国文学」比較文学研究（昭和五十一年）の著者島田謹二氏は本書を取上げて論じ、これを「上乘の文学的翻訳」と評価した（下巻、四六三―四七二頁）。巻末には梵文戯曲史、戯曲論の諸問題が簡潔明瞭にまとめられている。

同じ刀江書院からこれより先「バガヴァッド・ギーター」が公刊された（昭和二十五年）。純粋な意味での翻訳ではないが、「靈魂と肉体」「神」「輪廻」「道德」「解脱の道」「解脱」の六章の中に、先生はギーターをして自ら語りしめ、古代インド宗教詩の全貌を余すところなく提示された。付録に文献解題・研究史の細目を載せ、ギーター文学研究の指針が与えられる。

昭和五十四年春、講談社はその「古典インド叢書」の第一巻として、先生のギーターの邦訳を企画し、請に応じて先生



は初めてその全訳を試みられ、原稿は七月中に訳者の手を離れた。この業を終えるや先生の健康は遽かに衰え、脱稿後間もなく御入院、そのまま先生は二度とその書斎に戻られることがなかった。恩師高橋順次郎博士に捧げられた旧著の序文に言うように、ギーターは先生の「学窓の思ひ出」であったが、今ここにその全訳は絶筆となった。思えば奇しげな、又悲しい因縁といふべきである。最後に拙文を終るに当りて筆者は久しく薫陶を受けた辻先生の学恩に謝し、その人格と学問に敬愛の念を捧げつつ、今、古都の一隅に限り給う先生に思いを馳せ、万感こもこも胸に迫るのを覚えながら、謹んでその御冥福をお祈りする者である。

(追記) 拙文を草するに当りて東京大学文学部の駒本平也、風間喜代三、日本学士院の渡辺舞、豊山原典研究会の高橋尚夫、東洋文庫の松本明諸氏のお世話になった。記して感謝の意を表す。

右、追悼文に触れたところは先生の著書、翻訳書を中心としたものであるから、次下に先生の主要著述目録を掲載する。尚この目録はあくまで暫定的性格のものである。先生の「ヴェーダ学論集」の巻末に係ねられたもので、概して、若干の追加を行ったものである。

I. 単行本

1. ヴァニエリャット。ラジオ新書75. 4, 6, 197 pp., 東京1942.
2. バガヴァット・ギーター——古代印度宗教詩——. 3, 5, 231, 7 pp., 東京1950, 再版1955.
3. プラークラマとヴェラウタ・ヌートラとの関係。東洋文庫論叢33. 247 pp., 東京1952.
4. ヴェーダとヴァニエリャット。341, 18 pp., 東京1953.
5. インド文明の曙——ヴェーダとヴァニエリャット——。岩波新書619. VI, 207, 6 pp., 東京1967, 以後数刷。
6. 現存ヤジュル・ヴェーダ文獻——古代インドの祭祀に関する根本資料の文献学的研究——。東洋文庫論叢52. XI, 209 pp., 東京1970.
7. サンスクリット文学史。岩波全書277. XI, 354 pp., 東京1973.
8. サンスクリット文法。岩波全書280. XVI, 331 pp., 東京1974, 改訂第3刷1976, 第5刷1977.
9. サンスクリット読本。IX, 313 pp., 東京(春秋社)1975.
10. ヴェーダ学論集。XVI, 502 pp., 東京(岩波書店)1977.
11. 古代インドの説話——プラークラマ文獻より——。

XVII. 198 pp., 東京 (春秋社) 1977.

## II. 翻 訳

1. 法句経. 南伝大藏経23(1937), p. 3-8, p. 17-84.
2. 梵文金華瑠英. 印度 (辻編集) = 南方民俗誌叢書5. 東京1943, p. 721-830.
3. J. ネルー イソ卜の発見, 上・下(飯塚浩二・嶺山芳朗共訳). 800, 39 pp., 東京 (岩波書店) 1953, 1956. 以後数刷.
4. ジャータカ物語——イソ卜童話選——(渡辺照宏共訳). 岩波少年文庫113. 243 pp., 東京1956. 以後数刷.
5. シヤクソタラー. 205 pp., 東京 (刀江書院) 1956.
6. ヴェーダ文学. イソ卜集 (辻訳者代表) = 世界文学大系4. 東京 (筑摩書房) 1959, p. 3-76.
7. チャータクヤ・シヤタカ. 中野教授古稀記念論文集. 高野山大学1960, p. 183-199.
8. ヴェーダ. ヴェーダ・ソヴェスター (辻訳者代表) = 世界古典文学全集3. 東京 (筑摩書房) 1967, p. 3-168.
9. リゾ・ヴェーダ讃歌. 岩波文庫, 399, 77p., 東京1970. 以後数刷.
10. シヤクソタラー. 岩波文庫, 235 pp., 1977. (5. の再版).
11. アタルヴェー・ヴェーダ讃歌——古代イソ卜の呪法.

嶽 嵯 屋

岩波文庫, 270, 8 pp., 東京 1979.

## III. 論 文

1. Ueber indrāvato (RV. IV. 27. 4a). Wogihara commemoration volume. The Journal of the Taisho University 6-7 (1930), p. 131-138.
2. A bibliography of the late Professor Willem Caland with special reference to Vedic studies = Levensbericht van Prof. Dr. Willem Caland door J. Rahder. Leiden 1933, p. 13-26.
3. カータカ儀規の研究 (Prolegomena). 宗教研究臨時特輯号(1931), p. 83-95.
4. A collection of the sūtra-elements from the Kāthakam (Prolegomena). Commemoration Volume of the Science of Religion in Tokyo Imperial University (1934), p. 243-272.
5. 印度思想, ヴェーダ及びゾラー・ソヴェスターの思想, 上・下. 岩波講座 東洋思想(1934). 160 pp. (上述 I. 4に収録).
6. 比較言語学. 国語科学講座 I: 言語学(1934), p. 1-76.
7. 印度言語の系統. 岩波講座 東洋思想(1935). 66 pp.
8. 古代印度に於ける語源的説明に就いて. 『仏教学の諸問題』. 東京1935, p. 473-479.
9. On the designation-problem of the so-called Tokh-

集六十一巻 三六四

- arian language. 藤岡博士功績記念会, 言語学論文集: 東京 1935, p. 7-72. (Cf. Krause-Thomas, Tocharisches Elementarbuch, Bd. I (Heidelberg 1960) p. 22.)
10. 文献学・言語学・語源学. 言語研究 1(1939), p. 37-54.
11. ヴェーダ学の今昔. 仏教研究 III, 5 (1959), p. 129-165. (上述 I, 4に収録.)
12. 印度神話. 世界精神史講座3: 印度精神(1940), p. 1-50.
13. チャーンポーグヤ・ウバニツヤッポ 雑題. 季刊宗教研究 II, 1(1940), p. 178-193.
14. 吠陀文学に現はれたる倫理観. 岩波講座 倫理学 (1940), 78 pp. (上述 I, 4に収録.)
15. 印度語史の諸問題. 思想245(1942), p. 185-193.
16. 印度の演劇. 演劇 I, 6(1942), p. 28-44. (上述 II, 5に収録.)
17. ヤージュニヤヅラルキヤをめぐりて. 季刊宗教研究 V, 3(1943), p. 1-30.
18. 言語と文学. 印度=南方民俗誌 叢書 5, 東京 1943; p. 597-720.
19. 西天館訳書調査報告(序言). 東洋学報 31 (1947), p. 181-187.
20. シャンタラーの指標. 象徴 4(1948), p. 22-36.
21. 現存 Sāmaveda 文献の概観(Sambhita 篇). 慶大語学研究所 語学論叢(1948), p. 1-37.
22. 古代印度の婚姻儀式. 東洋文化研究11 (1949), p. 1-43.
23. イトリ・ウバニツヤッポの saṁdhi に就いて. 言語研究14(1949), p. 1-21. (下記31参照.)
24. 史書なき印度の歴史. 東洋文化1(1950), p. 143-149.
25. チャーガルーヤ・ウバニツヤッポ. 宇井伯寿博士還暦記念論文集. 東京1951, p. 311-329.
26. Etymologia upanishadica. 印度学仏教学研究 1 (1952), p. (1)-(17).
27. 梵語. 世界言語概説上. 東京1952, 再版1969, p. 61-122.
28. 散佚ゾラーマナ文獻より. 金田一博士古稀記念言語民俗論叢. 東京1953, p. 933-949.
29. トカラ語研究の近況. 東洋学報 35 (1953), p. 311-331.
30. パーシュカラ・マントラ・ウバニツヤッポについて. 宮本正尊教授還暦記念論文集. 東京1954, p. 3-17.
31. Some linguistic remarks on the Matrī Upaniṣad. 山口博士還暦記念印度学仏教学論叢. 京都 1955, p. 92-

- 105.
32. Linguistic features of "Four unpublished Upaniṣadic texts." Dr. S.K. Belvalkar Felicitation Volume. Benares 1957, p. 19-27.
33. The marriage-section of the Āgnesya-Gīhyasūtra. *Memoirs Toyo Bunko* 19(1960), p. 43-77.
34. ヲーナーヅァ・ソエラウタ・ヌートラ九・一・一 覚え書. 干瀧博士古稀記念論文集. 福岡1964, p. 3-22.
35. アドゾダ・ゾラーア・アチについて. 鈴木学術財団年報 1(1964), p. 37-46.
36. Notes on the Rājāsūtra-section (IX. 1) of the Mānava-śrautasūtra. *Memoirs Toyo Bunko* 23 (1964), p. 1-34, 25(1967), p. 121-143.
37. ケーソソ・ダールビヤをめぐって. その一. 金倉博士古稀記念印度学仏教学論集. 京都1966, p. 123-137. —その二. 鈴木学術財団年報 3(1966), p. 29-34.
38. 故 Louis Renou 博士(1896-1966)主要著作目録(暫定). 東洋学報49(1967), p. 01-033.
39. On the formation of the Adbhuta-Brahmana. *ABO. RI.* 48-49 (1968), p. 173-178.
40. 法華経の言語. 金倉円照編法華経の成立と発展. 京都1970, p. 3-21.

樂 樂 原

41. ソナーヅァ・アソエラウタ物語. 金田一博士米寿記念論集. 東京1971, p. 864-849.
42. ヲイトラヤニー・サンヒター四・八・一——ゾエマ散文研究への一提言——. 東方学会創立二十五周年記念東洋学論集. 東京1972, p. 864-886.
43. ケルト語学昔ばなし. *Studia Celtica Japonica* 5-6 (1973), p. 1-5.
44. イソド文法学概観. 『サソスクリツト文法』附録. 鈴木学術財団年報11(1974), p. 1-28.
45. サソスクリツト文学の特殊点. 日本学士院紀要 32-33 (1974), p. 121-130.
46. 古代イソドの婚姻儀式. 鈴木学術財団年報 12-13 (1975-1976), p. 20-45.
47. 古代イソドの葬送儀式. 法華文化研究2(1976), p. 1-31.

IV. 書 評 (主要なものに限る)

1. *Asiatica. Festschrift Friedrich Weller, herausgeg. von Johannes Schubert und Ulrich Schneider.* Leipzig 1954. 東洋学報 (以下略号 T. G.) 38(1955), p. 238-255.
2. *Bailey, D. R. Shackleton: The Śatapataśraṭha of Mātricea.* Cambridge 1951. T. G. 33 (1951), p. 423-

440.

3. Bailey, H. W.: Khotanese Buddhist texts. London 1951. T. G. 35(1952), p. 85-87.—Indo-Scythian studies being Khotanese texts I-V. Cambridge 1945-1963. T. G. 47 (1964), p. 120-124.—Do. I-III, 2nd edition. *ibid.* 1969. T. G. 52(1969), p. 284-286.—Saka-documents. First volume. Corpus inscriptionum Iranicarum, pt. II, vol. V. London 1968. T. G. 54 (1971), p. 257-258.—Saddharma-puṇḍarīka-sūtra. The summary in Khotan Saka. Canberra 1971. T. G. 54(1971), p. 268.
4. Bodewitz, H. W.: The daily evening and morning offering (agnihotra) according to the Brāhmaṇas, Leiden, 1976. III. 20(1978), p. 292-294.
5. Burrow, T.: The Sanskrit language. London 1954. 印度学仏教学研究4(1956), p. 562-566.
6. Caland, Willem: Śākhāyana-Śrautasūtra, translated into English. Edited with an introduction by Lokesh Chandra. Nagpur 1953. T. G. 37(1954), p. 118-122.
7. CASS (Centre of Advanced Study in Sanskrit) Studies, Nos. 1 and 2, edited by R. N. Dandekar, Poona 1973-1974. III. 19 (1976) pp. 278-282.
8. Champarthy, George: An Indian rational theology. Introduction to Udayana's Nyāyakusumāñjali. Wien 1972. T. G. 56(1975), p. 398-401.
9. Edgerton, Franklin: The Bhagavad Gītā, translated and interpreted. 2 pts. Cambridge (Mass.) 1944. 宗教研究138 (1954), p. 105-110.—Buddhist Hybrid Sanskrit. Grammar and dictionary. 2 vols., New Haven 1953.—Do. Reader. *ibid.* 1953. T. G. 36 (1953), p. 261-267.
10. Göbl, Robert: Die drei Versionen der Kanisika-Inschrift von Surkh Kotal. Wien 1965. T. G. 48(1966), p. 544-553.
11. Gonda, J.: Sanskrit in Indonesia. Nagpur 1952. T. G. 38(1955), p. 115-124.
12. Hara, Minoru(原美): 古典イソフの運命観. 東大・文学部研究報告4(1971), p. (1)-(319). 鈴木学術財団年報9(1972), p. 87-88.—ゾウズ・チャリタ(仏陀の生涯) 大乗仏典13. 東京1974. 同年報 10(1973), p. 98-99.
13. Horsch, Paul: Die vedische Gātha-und Śloka-literatur. Bern 1966 III. 12(1969), p. 27-34.
14. Indo-Iranian Journal, vol. I (1957). イソフ文化 1 (1958), p. 71-76.

15. Jog, K.P. : The Vimalodayamālā of Jayantasvāmīn, Poona 1974. III. 18(1976), p. 274-276.
16. Kausikasūtra-Darśabhāṣya, edited by H. R. Diwekar, etc. Poona 1972. T. G. 55(1972), p. 244-246.
17. Laddu, S.D. : Evolution of the Sanskrit language from Paṇini to Patañjali. Poona 1975. III. 18(1976), p. 273-274.
18. Mayeda, Mrs. Noriko and Brown, W. Norman : Tawi tales : Folk tales from Jammu. New Haven 1974. 鈴木学術財団年報 11(1974), p. 80-81.
19. Mylius, K. : Chrestomathie der Sanskrit-literatur, Leipzig 1978. T. G. 60(1979), pp. 243-245.
20. Mylius, K. : Wörterbuch, Sanskrit-Deutsch, Leipzig 1975. Tōhōgaku 57(1979), p. 149.
21. Mylius, K. : Älteste indische Dichtung und Prosa, Vedische Hymnen, Legenden, Zauberlieder, philosophische und ritualistische Lehren, Leipzig 1978. Tōhōgaku 57(1979) p. 150.
22. Nishida, T. (西田龍雄) : 西夏文華教経 I. 京大・文学部1975. 鈴木学術財団年報 12-13(1975-1976), p. 114-115. (なお『西夏語の研究』2 pts. 東京1964, 1966について)は、日本学士院紀要 XXXVI, 2. (1968), p. 27-28.)
23. Oberhammer, Gerhard : Offenbarung, geistige Realität des Menschen. Wien 1974. T. G. 56(1975), p. 401-405.
24. Oberhammer, G. : Transzendenzfahrtung, Vollzugshorizont des Heils. Wien 1978. T. G. 60(1979) pp. 241-243.
25. Olivelle, P. : Vāśudevāstrama, Yātiḥarṇaprakāśa 2 pts, Vienna 1976, 1978. T. G. 60(1978), p. 199-202.
26. Rāghu Vira and Lokesh Chandra : Jaiminiya-Brāhmaṇa of the Sāmaveda. Complete text critically edited. Nagpur 1954. T. G. 37 (1955), p. 526-529. (Cf. T. G. 38(1955), p.256.)
27. Renou, Louis : Histoire de la langue sanskrite. Paris 1956. 言語研究31(1956), p. 51-57.
28. Shafer, Robert : Ethnology of ancient India. Wiesbaden 1954. T. G. 38(1955), p. 467-471.
29. Snellgrove, D. L. : The Hevajra Tantra. 2 pts. London 1959. T. G. 42(1960), p. 431-449.
30. Śrautakośa. Sanskrit section ed. by C. G. Kashikar, English section transl. by R. N. Dandekar. Poona 1958 ff. T. G. 41(1958), p. 374-378 (.Skt. sect. vol. I, Engl. sect. vol. I, pt. 1, 1958).——T. G. 46(1963),

- p. 433-434 ( :Engl, sect, vol. I, pt. 2, 1962).——T. G. 54(1971), p. 261-263 ( :Engl sect. vol. II, pt. 1, 1970).
31. Sternbach, Ludwik: *Cāṅkya-niti-text-tradition*. Vol. I, 2 pts. Hoshiarpur 1963, 1964. III, 9(1966), p. 301-307.——Vol. II, 3 pts. *ibid.* 1967, 1968, 1970. III, 14 (1972), p. 257-260.——*Cāṅkya-rāja-niti*. Maxims on rājāniti, compiled and edited with critical apparatus. Madras 1963. III, 9(1966), p. 307-308.
32. Thite, G. U.: *Sacrifice in the Brahmana-texts*. Poona 1975. III, 19(1976), p. 276-278.
33. Taittiriya Saṁhitā with the Padapāṭha and the commentaries of Bhaṭṭa Bhāskara Miśra and Sāyaṇ-cārya, edited by N. S. Sontakke and T. N. Dharmadhikari. Vol. I, Poona 1970, vol. II, 1972. T. G. 54 (1971), p. 257-258, T. G. 55(1973), p. 513-515.
34. Yoroï, Kiyoshi: *Gaṇeśagīṭā*. A study, translation with notes. The Hague-Paris 1968. 鈴木学術財団年報 5-7(1968-1970), p. 55-56.

## 第五回東亜アルタイ学会

岡 田 英 弘

東亜アルタイ学会 (East Asian Altaistic Conference 東亞阿爾泰學會議) の由来については、本誌の第五十四巻第四号にすでに記したから、それを参照せられたい。前回は一九七一年十二月に開かれたが、今回はちょうど八年後の一九七九年十二月二十六日から三十一日に、台北市士林区外双溪の国立故宮博物院で開かれた。

その発端を記すと、同じく本誌の第六十巻第一・二号に報じた国際清史檔案研討会 (International Symposium on Ch'ing Archival Collections Located in Taiwan 一九七八年七月、台北) が、非常な盛会であったところから、主催者の中華民国側から、この次は東亜アルタイ学会を招請しようとの議が起り、ひきついで日本で開かれた第十五回野尻湖クワリルタイに参加した故宮博物院の昌彼得図書文献処長が、第五回東亜アルタイ学会を台湾で開くことを宣言するに及んで決定的となった。ただし第四回の中心的オーガナイザーであった国立台湾大学文学院歴史学系の陳捷先教授も、また昌彼得処長も、その後アメリカに客員教授としてそれぞれ出張し、陳教授は一九七九年九月まで、昌処長は同じく十月まで台湾